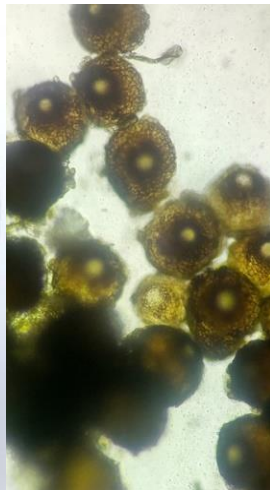


カボチャ果実の病害その 3+虫害

防除室だより Vol. 55「カボチャ果実の病害」で疫病、炭疽病、軟腐病を、Vol. 76「カボチャ果実の病害その 2」で立枯病、クリスタル症状、日焼け果を紹介しました。今回はつる枯病、白斑病、ウリハムシ幼虫被害について簡単にまとめてみました。



1. カボチャつる枯病

収穫前に圃場で無病徴感染していたものが、貯蔵中に発病、腐敗します。これは 7 月上旬に収穫した果実を貯蔵し、10 月に発病していたものです。病斑は初め白色で、分生子殻や偽子のう殻が密生してくると黒くなります。栽培中の傷や日焼けは感染のきっかけになりやすく、収穫期の降雨で感染が増え、貯蔵中の多湿で発病が増えます。



2. カボチャ白斑病

葉では葉柄、葉脈に灰白色カスリ状の病斑を生じ、葉面には微小な病斑を散生します。茎の病斑がもっとも重症化しやすく、大量の分生子を形成しています。果実には白色、小隆起状の病斑を散生します。梅雨期の降雨で収穫期の果実に急進展し、病斑は果面全体に分散するため、外観を著しく損ねます。



3. ウリハムシ幼虫による食害

台座敷きを行っていなかった 7 月収穫カボチャで、直接地面に接した部分に深さ 5mm 程度の穴が多数みられました。圃場で果実下にみられた幼虫を採取し果実に接種したところ症状が再現されました。加害を終えた幼虫は土繭で蛹化し、羽化してきたのはウリハムシでした。【本件は農林総合事務所の実施した接種試験による原因解明です】